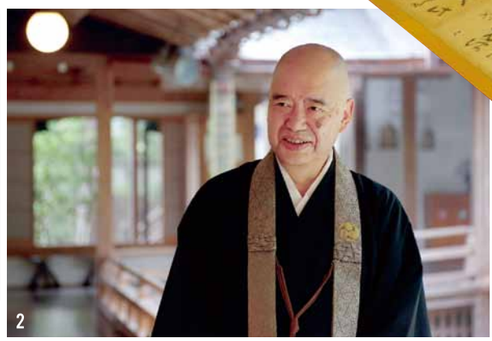
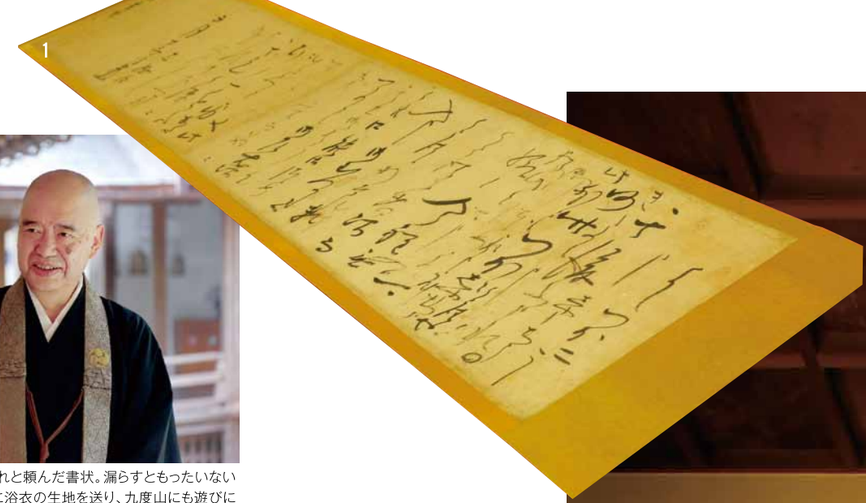
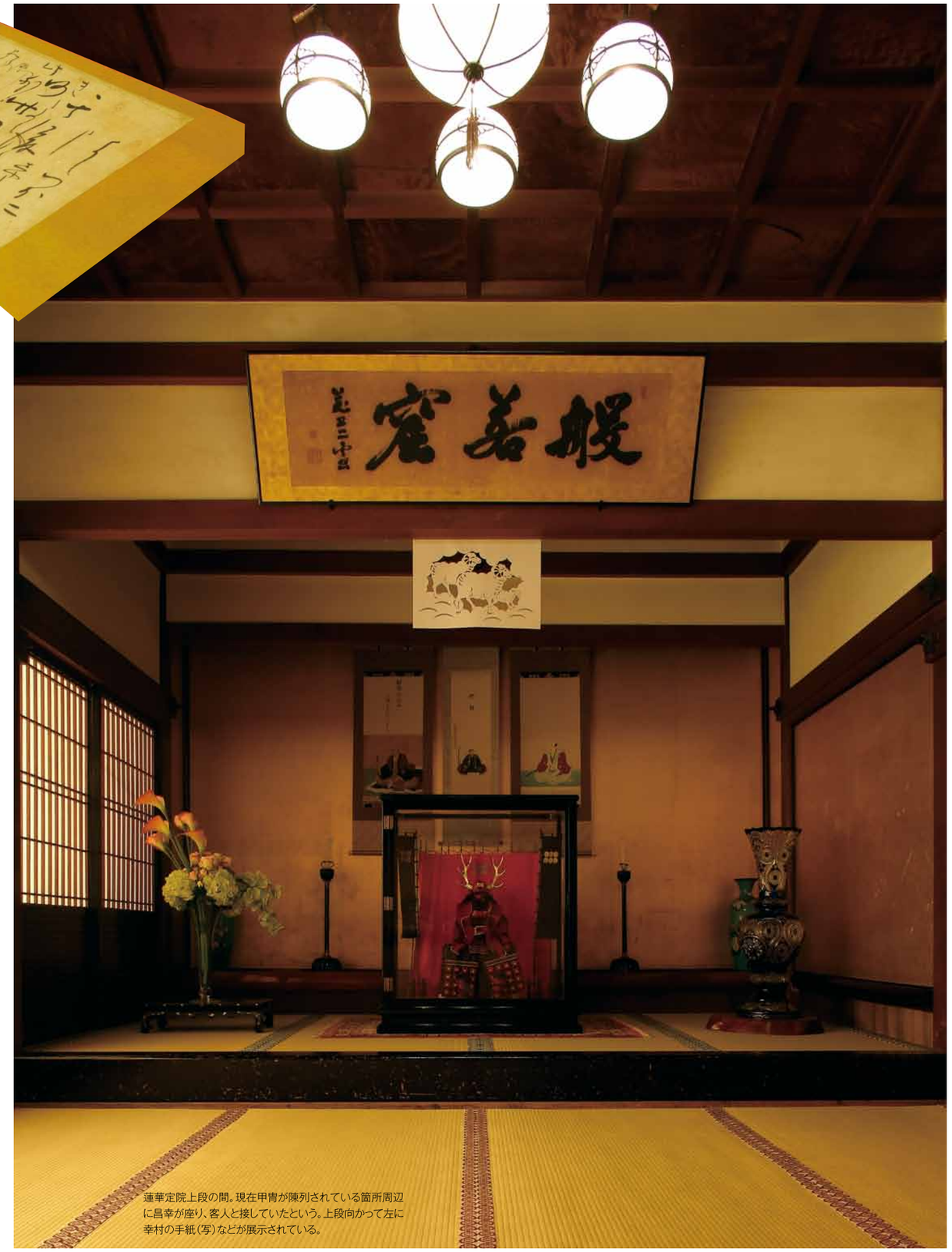




1.幸村が国元の家臣に焼酎を送ってくれと頼んだ書状。漏らすともったいないのでロをしっかりと縛ってくれ、お返しに浴衣の生地を送り、九度山にも遊びにきて欲しいと書かれている。**2.**数千あった寺もいつの間にか消滅した。「当院が残っているのも真田家の寄進があったからです」と語る蓮華定院の添田隆昭住職。故に六文銭の家紋が各所に施されている。 **3.**六文銭の提灯が灯る蓮華定院の正門。 **4.**六文銭が描かれたお湯のみで一服。

蓮華定院
住所／伊都郡高野町高野山700　電話／0736-56-2233



蓮華定院上段の間。現在甲冑が陳列されている箇所周辺に昌幸が座り、客人と接していたという。上段向かって左に幸村の手紙（写）などが展示されている。

高野山だったからこその復活劇

西軍・石田三成対東軍・徳川家康。天下を分けた関ケ原の合戦はわずか1日、西軍の敗北で終了する。徳川秀忠を窮地に追いやった昌幸・幸村父子は、当然死罪を言い渡されるが、徳川家に仕えていた長男信之の必死の嘆願により、高野山での蟄居でなんとか許された。そして幸村たちは、宿坊契約を結んでいた蓮華定院に、16人の家来とその従者あわせて60人近い大所帯で身を寄せた。

最盛期には数千の寺院があり、何万という僧侶が修行する〝大宗教都市〟であった高野山だが、開創以来の女人禁制。家来の家族だけでなく、幸村の妻も高野山では暮らせない。また山上の寒さは、高齢の昌幸には堪えたのだろう。蓮華定院に6ヶ月程度寄寓した後、幸村父子と家臣たちは妻子を伴って、同じ高野山領である麓の九度山に移り住むことになる。表面的には同じ高野山であり、かろうじて〝生活する場を変えた〟といえないこともない。しかしこれらは一般的ではなく、幸村父子を思う蓮華定院の好意的な処遇であったのだろう。

大坂からさほど遠くない高野山に流刑される。そして蟄居といえど比較的自由な高野山領・九度山での暮らし。この組合せが、後の幸村奮起の物語の重要な要素となった。

14 years lived Red Courage

高野山奥之院では敵も味方もなく誰もが安らかに眠る

高野山奥之院参道周辺には、20万基を超える諸大名の墓石や、祈念碑、慰霊碑が建ち並ぶ。中には石田三成や伊達政宗、徳川家や真田家などの戦国武将が敵味方なく安らかに眠っている。死を常に意識していた武将たちにとって、空海の元で眠ることは未来永劫の安らぎを保証するものであったのかもしれない。高野山が今も日本における信仰の聖地であり続けているのは、そういった一切を受け入れる懐深さにあるのだろう。

奥之院にひっそりと佇む信州真田家墓所。